様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１４０３０

研究課題名（和文）国語科におけるブッククラブの指導方法による授業研究：物語創作活動の効果に着目して

研究課題名（英文）Improving Japanese language teaching through the Book Club method

研究代表者
勝田　光（Katsuta, Hikaru）

東洋大学・文学部・講師

研究者番号：３０７９２１１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自立した読み手を育てる国語科を中心とした読むことの学習指導のカリキュラムを開発するために、アメリカの読むことの学習指導論と指導法について文献研究ならびにフィールド調査を行い検討すると同時に、国語科で行われているそれらと類似した実践例について一次資料を集めて検討した。その結果、（1）物語創作指導を取り入れた指導の実際とその意義、（2）個人読書を核とするリーディング・ワークショップの実際とその意義を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ブック・クラブやリーディング・ワークショップの実践報告はこれまでにもあったものの、その実践を行う意義について、理論、授業中の生徒のパフォーマンス、質問紙とインタビュー調査から検討したものは少なかった。本研究の学術的意義は、それらを検討し、学習形態、読書意欲、読書時間などの観点から実践の意義を明らかにした点にある。国語教育の代表的な月刊誌において2019年に物語を読む活動（読解）と書く活動（創作）をどう関連づければ良いか、という特集が組まれるなど、物語創作活動への実践的関心は高まっており、この点に関わって具体的な提案を行った点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to understand the importance of incorporating story making activities into reading instruction. The book club method that was developed by Taffy Raphael was examined theoretically and practically. As a result, the advantages of her methods was identified as follows: (1) Collaborative learning, (2) Reading and writing connection, and (3) Enhancing students' creativity. In addition, the reading workshop method was also examined theoretically and practically as a consequence of examining the book club method. As a result of observing the reading workshop, and conducing students' interviews and questionnaires, its advantages were identified as follows: (1) Increased reading motivation, (2) More independent reading time, and (3) Teacher/student conferences. Overall, this study revealed the advantages of the book club and reading workshop methods which are uncommon in Japanese Language Arts classes compared to the traditional teaching method.

研究分野：国語科教育

キーワード：自立した読み手　ブック・クラブ　物語創作活動　リーディング・ワークショップ　教科書を用いた授業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

【国内・国外の研究の動向】

現在、読むことの学習指導では、優れた読者が読む時に用いている様々な読解方略を学習者に習得させるために、教師から生徒に段階的に読むことの責任を渡していくというアプローチが一般的になっている（Duke, Pearson, et al., 2011）。こうしたアプローチをとり、優れた読者を育成するために効果的だと評価されている実践として、イリノイ大学の Raphael らが提案した「ブック・クラブ」の指導法がある(Raphael, Pardo, & Highfield, 2002/2012)。他にも類似する指導法がいくつか翻訳され、近年日本の国語科でも注目を集めている（山元・居川, 2015）。

【ブック・クラブの特徴】

ブック・クラブに類似する方法は様々に提案されているが、大きく分けて以下の 4 つの特徴を持つ。本研究では、主として米国の研究者によって提案されてきたこれらの指導法が、国語科教育の研究者によって注目されるに当たり、(4)の特徴がほとんど見過ごされてきたことに注目する。なぜなら、この(4)の特徴こそ、従来の国語科で不足していた「文章を読んで、それを使って新たな創造を行う読者」や「文章を批判的に読む読者」の育成につながると考えられるからである（勝田, 2017）。

（1）一冊の本ではなく、あるテーマのもとたくさんの文章を読む。
（2）個人的な反応や分かったことについてクラスメイトと交流する。
（3）読書日誌などを活用し、読んだ文章について記録する。
（4）本を読むだけでなく、プロジェクトを立ち上げて表現活動や創作活動を行う。

２．研究の目的

本研究の目的は、「ブック・クラブ」の指導法における物語創作活動に着目し、日米両国の教室においてフィールドワークを行い、生徒の学習過程の具体的な分析に基づいて国語科で育てるべき読者について提言することである。

３．研究の方法

本研究では、文献研究とフィールド調査（授業観察、質問紙、インタビュー調査）の方法を用いる。具体的には、文献研究では、デイビット・ピアソンらが提案した「読むことの責任の段階的移行」モデルとそのモデルによせられた批判、そしてダグラス・フィッシャー・とナンシー・フレイによる責任の段階的移行モデルの修正版を取り上げて、ブック・クラブの理論的枠組みを検討する。フィールド調査では、読むことの学習指導に物語創作活動を取り入れてブック・クラブと類似した実践を行っている筑波大学附属小学校の青山由紀教諭による実践を分析する。また、アメリカでブック・クラブの実践がどう行われているか、授業観察を行う。

４．研究成果

本研究の成果について、当初の予定通りに行われて得られた研究成果と、ブック・クラブの研究を進めていく中で新たに注目することになったリーディング・ワークショップに関する研究成果に分けて報告する。

【ブック・クラブに関する研究成果】

まず、文献研究では、責任の段階的移行モデルを中心に検討し、ブック・クラブの意義を理論的に明らかにした。責任の段階的移行モデルとは、1983 年にデイビッド・ピアソンらが提案した読むことの学習指導モデルであり、課題を遂行するための責任を教師が全て引き受ける地点から生徒が引き受ける地点まで段階的に移行していくことを図にしたものである。このモデルを批判した論文を複数検討し、このモデルに潜む問題点を（1）一人の生徒を一方的な支援の受け手として位置づけていること、（2）教師に求められる仕事は「優れた読者」が読む時に使っている方略を教える以外にもあること、

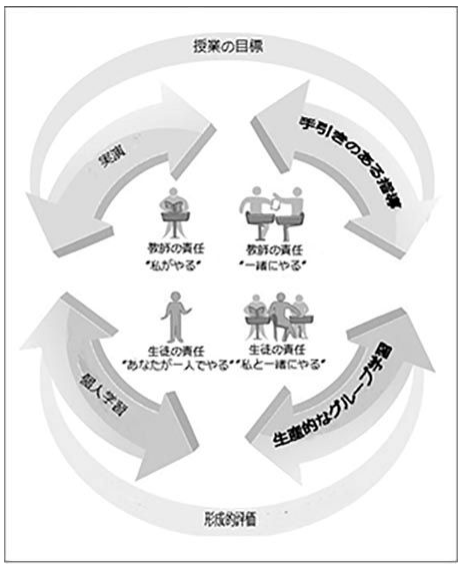

図１責任の段階的移行モデルの修正版

（3）教師と生徒の関係を一般化して図式的に捉えることの困難さ、以上 3 点にまとめた。さらに、ダグラス・フィッシャーとナンシー・フレイによる「責任の段階的移行モデル」の修正版（図 1）を具体的な実践レベルで検討した。

次に、調査研究では、筑波大学附属小学校の青山由紀教諭による実践「2 部 2 年の『ふたりシリーズ』をつくろう」（全 13 時間）を検討した。実践の選定理由は、がまくん・かえるくんシリーズというテーマのもと複数の文章を読み、同じテーマで物語を書くという流れがブック・クラブの実践の典型と捉えられたからである。児童が創作した「がまくん・かえるくん」シリーズ全 33 作品について、（１） 事件解決の構造ないしは繰り返し構造が認められるかどうか、（２）物語創作上のアイディアをどこから得たか、（３）物語の創作意図はなにか、以上 3 つの観点から分析を行った結果、ほとんどの児童は、構造化した物語を作れたことが分かった。また、半数程度の児童は、プロットについてオリジナル作品のいずれかを参考にしていたことも分かった。さらに、多くの児童は、物語を創作する上で様々な工夫を試みていたことも「あとがき」の記述から明らかになった（図 2）。読んだ文章を踏まえて物語を作る時どう創造性が発揮されたかの一端を解明でき、それを踏まえて読むことの学習指導に物語創作活動を取り入れる場合、まず複数の文章を読ませることが重要であることを指摘した。

1. 物語の教訓	11
2. 登場人物の造形	8
3. 読者を楽しませる	5
4. 読者を引き込む展開	5
5. 本の仕組み	4
6. 効果的なセリフ	2
7. 文体	2
8. 物語の場	1
9. 物語の小道具	1
10. 場面にあわせた色使い	1
合計	40

図 2．物語創作においてみられた工夫

【リーディング・ワークショップに関する研究成果】

ブック・クラブに関する研究を進めていく中で、同じくアメリカで開発された読むことの学習指導法ではあるものの、個人読書を核とし、その間に行われる教師と生徒のカンファランスによって特徴づけられるリーディング・ワークショップという方法を知ることになった。当初研究することを予定していなかった指導法ではあるものの、「国語科で育てるべき読者について提言する」という研究目的に鑑み、研究の途中で新たに調査対象に含めることとなった。2017 年から 2018 年にかけて、当時筑波大学附属駒場中・高等学校教諭だった澤田英輔教諭によるリーディング・ワークショップの実践を観察した。

まず、2017 年には、リーディング・ワークショップの 1 時間の授業過程を分析し、本実践の意義を検討した。1 時間の授業を（1）生徒によるブック・トークと教師によるミニ・レッスン、（2）自分が読みたい本を選んで一人で読む個人読書とカンファランス、（3）個人読書の間に読んだ本をペアで共有する時間、以上 3 つのフェイズに分けて、それぞれのフェイズで何が行われているかを記述し、その活動にどんな意義があるかを考察した。本実践の意義は、アメリカの代表的な研究者であるデイビット・ピアソンならびにネル・デュークらによって提案された「優れた読み手を育てるために必要な 10 のこと」に即して検討した。この論文は、国内の代表的な国語教育の学会である全国大学国語教育学会の学術誌『国語科教育』に掲載された。

次に、2018 年には、リーディング・ワークショップの意義についてより詳しく検討するために、リーディング・ワークショップの授業全 5 時間と、「山月記」を教材とした従来型の授業全 7 時間、以上 12 時間を全て観察し、さらに生徒への質問紙とインタビュー調査、教師へのインタビュー調査も実施した。収集した音声データを全てプロトコル化し、分析した結果、生徒がどのような点にリーディング・ワークショップの意義を感じているか、あるいは「山月記」を教材とした従来型の授業に意義を感じているかなどが明らかになった。つまり、両方の指導法にそれぞれ異なった利点があり、国語科で自立した読み手を育てるためには、どちらか一方の指導法ではなく両方を組み合わせて読むことの学習指導のカリキュラムを作ることが重要であることが分かったのである。この成果は、2019 年 10 月にニューオリンズで開催された International Literacy Association の年次大会で発表した。その後、論文にまとめ、現在 International Literacy Association の学術誌 *Journal of Adolescent & Adult Literacy* に投稿し、結果を待っている状況である。

以上、当初の計画からは若干変更が生じたものの、ブック・クラブとリーディング・ワークショップという指導法に着目して、国語科で自立した読み手を育てるためにどうすれば良いか、と

くに学習形態（個人学習、グループ学習、一斉指導）の観点から具体的に提案でき、当初の期待以上の成果が得られたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 勝田 光、澤田 英輔	４．巻 84
２．論文標題 リーディング・ワークショップによる優れた読み手の育成――1時間の授業過程の分析――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国語科教育	６．最初と最後の頁 58～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20555/kokugoka.84.0_58	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 勝田光	４．巻 7
２．論文標題 小学校教員養成課程の学生は、どんな国語教師になることを目指せば良いか ―ロバート・ラデルの「影響力のある教師」に関する研究を手がかりとして―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 九州国語教育学会紀要	６．最初と最後の頁 9，20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 勝田光	４．巻 42
２．論文標題 小学校国語科における物語創作をゴールにした読むことの学習指導-小学2年生が創作した「がまくん・かえるくん」シリーズの分析-	５．発行年 2017年
３．雑誌名 国語と教育	６．最初と最後の頁 40，53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 勝田光	４．巻 44
２．論文標題 米国における読むことの「責任の段階的移行」をめぐる 議論について:その批判と具体化に着目して	５．発行年 2017年
３．雑誌名 人文科教育研究	６．最初と最後の頁 17,41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi/10.15068/00150846	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hikaru Katsuta	4．巻 special issue
2．論文標題 The value of studying words and deeply thinking using semantic maps in a Japanese reading class	5．発行年 2018年
3．雑誌名 SEAMEO Journal	6．最初と最後の頁 11，19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 勝田光	4．巻 569
2．論文標題 『作家のように読む』論と『作文泥棒』の実践	5．発行年 2019年
3．雑誌名 月刊　国語教育研究	6．最初と最後の頁 4，9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 勝田光	4．巻 86
2．論文標題 読者反応理論からみた文学教育における深い学び	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語科教育	6．最初と最後の頁 5，7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.86.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Hikaru Katsuta
2．発表標題 A Challenge for Language Literacy by Using Semantic Map for Knowing the Value of Terms
3．学会等名 SEAMEO- University of Tsukuba Symposium VI（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 勝田光
２．発表標題 米国における「読むことの責任の段階的移行」をめぐる議論について-その批判と具体化に着目して-
３．学会等名 全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 勝田光
２．発表標題 文学教育における「深い学び」―新学習指導要領下における文学教育の方向性―
３．学会等名 全国大学国語教育学会　春期大会　第136回　茨城大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hikaru Katsuta & Eisuke Sawada
２．発表標題 Incorporating reading workshop into the Japanese Curriculum: How it helps students to be an independent reader.
３．学会等名 International Literacy Association 2019 Conference, New Orleans, LA.（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 勝田光	４．発行年 2019年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 266
３．書名 新たな時代の学びを創る　中学校・高等学校国語科教育研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考